逃げようとする私の腰を無理やり掴んでスカートとたくし上げると、先生はおもむろにズボンを脱ぎ始めました。

自分は今襲われているという現実感をようやく取り戻し、私は悲鳴を上げることができましたが、声は静かに廊下を反響しただけで返ってくる声も足音もありません。

私は泣きながら先生に止めるように言いました。けれど、先生は肉棒をそそり立たせて下卑た笑みを浮かべたまま、私の腰を引き寄せ、強引に処女の私の陰部にそれを挿入しました。

強烈な苦痛と共に、赤黒い鮮血が太股を伝い溢れでるのがわかりました。

やっぱり処女かひさしぶりに強姦し甲斐のあるいい獲物がきたもんだぜ

バッチリ処女膜ブチ抜いてかわいいビッチマンコにしてやるからな！

先生やめてっ！

いやっ！離してえっ！！

先生は私をトイレの前で屈ませ、いきなりスカートとパンツを強引に脱がせました。
私は突然の事に逃げたい気持ちでいっぱいでしたが、この状況ではヘタに抵抗することもできません。

聞こえちゃうっ

せっ　先生
だめぇぇ…

「これからたっぷり便器にぶちまけるんだ。お前もしてくか？」
そう扉の向こうの生徒に畳み掛けると、男子生徒の方は興味を失ったようで、
空返事のあとに、おしっこをする音が響いてきました。

少し安心できたはずなのに、先生はそのまま止まることを知らず、肉棒を私の膣に挿入しました。
私は声がでないよう必死に便器に顔を沈めました。あまりの状況に頭が沸騰しそうでした。
けれど、だんだん普段男の子達が排泄してる場所に顔を近づけてるという事に、
私は自分でも理解できないほど興奮してきてしまいました。

先生の精液の臭いと、男子トイレの臭気と、肉棒で突き刺されてるという事と、一枚の板の向こうに
クラスメートがいるという事と、私の頭の中は先生のせいでもうめちゃくちゃになっていました。

授業中だろう
サボってないでさっさと小便して戻れ
それともデカイほうか？

ズリュ
ズプッ
ズプッ
ズブ
ズブ
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ

うーい…

昼が過ぎ、午後の授業が始まった頃です。
その頃になって、ようやく先生の思惑を身体で理解させられる事になってしまいました。
前張りをされた陰部がだんだん痒くなってきて、はずしたくてたまらなくなってきました。
精液のせいか前張りのせいか、だんだんかぶれてる様な感覚になってきて耐えられなくなっていました。
どっ　どうしよう…
もうダメだよお
痒いよう…
でも、はずしたら精液が垂れてきてしまうし、山田先生に怒られてしまいます。
どんな罰が待ってるかなんて考えたくもありません。
それに、前張りを外して精液が垂れてきたら、周りのみんなに精液の臭いを悟られるんじゃないか不安で、
とてもじゃないけどできませんでした。
女子以上に男子がすぐ気づくでしょうし、騒がれたら私だとバレなくても恥ずかしくて耐えられません。
ひくっ
ハァ
ハァ
ドキ
ドキ
ピクピク
ピクン
ピク